金鋳原遺跡

発掘調査概報

1982

掛川市教育委員会

は　じ　め　に

近年、道路の新設や拡張、宅地の造成、構造改善事業など、社会開発が急速に進み、埋蔵文化財に対する喫緊な事態に直面しております。

埋蔵文化財はご存知のように地下に埋もれているものが多く、知らないまま開発されたりする危険が高いものであります。

このようななかで、このたび土地所有者の深いご理解によって、茶園改植に先だっての事前発掘調査が周倒な準備のもとで実施できました。そして、いにしえびとの生活の跡である住居跡や墓域が発見されましたことは、原始時代の歴史の１頁を埋めることができ、大きな喜びであります。

ここに、発掘調査の関係者、関係諸機関ならびに土地所有者、地元関係者に感謝申しあげるとともに、本書が資料としてお役にたてば幸甚であります。

昭和５７年３月３１日

掛川市教育委員会
教育長　佐　藤　正　夫

例　　言

1. 本書は昭和56年度文化財保存事業として国および静岡県の補助金を得て、掛川市教育委員会が調査主体となって昭和56年7月1日から昭和57年3月31日にかけて実施した金鋳原遺跡の発掘調査概報である。

2. 調査は掛川市教育委員会の岩井克允が担当し、松本芳親、芝本辰男、野口英生の参加を得て行なった。

3. 本書の執筆はⅠ・Ⅲ・Ⅳを岩井克允が行ない、Ⅱを松本芳親が担当した。実測図の整理・清書・写真撮影は岩井、青野富士夫、渡辺康弘が担当した。

4. 調査の実施にあたっては、土地所有者の萩田　正氏など多くの方々に協力いただいた。

5. 本調査にあたり、静岡県文化財専門委員、斉藤忠・長田実・若林淳之、静岡県教育委員会、渡辺房男・池谷和三・岡田恭順・平野吾郎の各氏に御指導をいただきました。

目　　次

Ⅰ　経　　過 …… 3

1. 調査に至る経過 …… 3
2. 調　査　経　過 …… 3

Ⅱ　位置と環境 …… 4

1. 位　　置 …… 4
2. 自然的環境 …… 4
3. 歴史的環境 …… 4

Ⅲ　調査の内容 …… 5

1. 土　　層 …… 5
2. 遺　　構 …… 5
3. 遺　　物 …… 11

Ⅳ　ま　と　め …… 12

挿　図　目　次

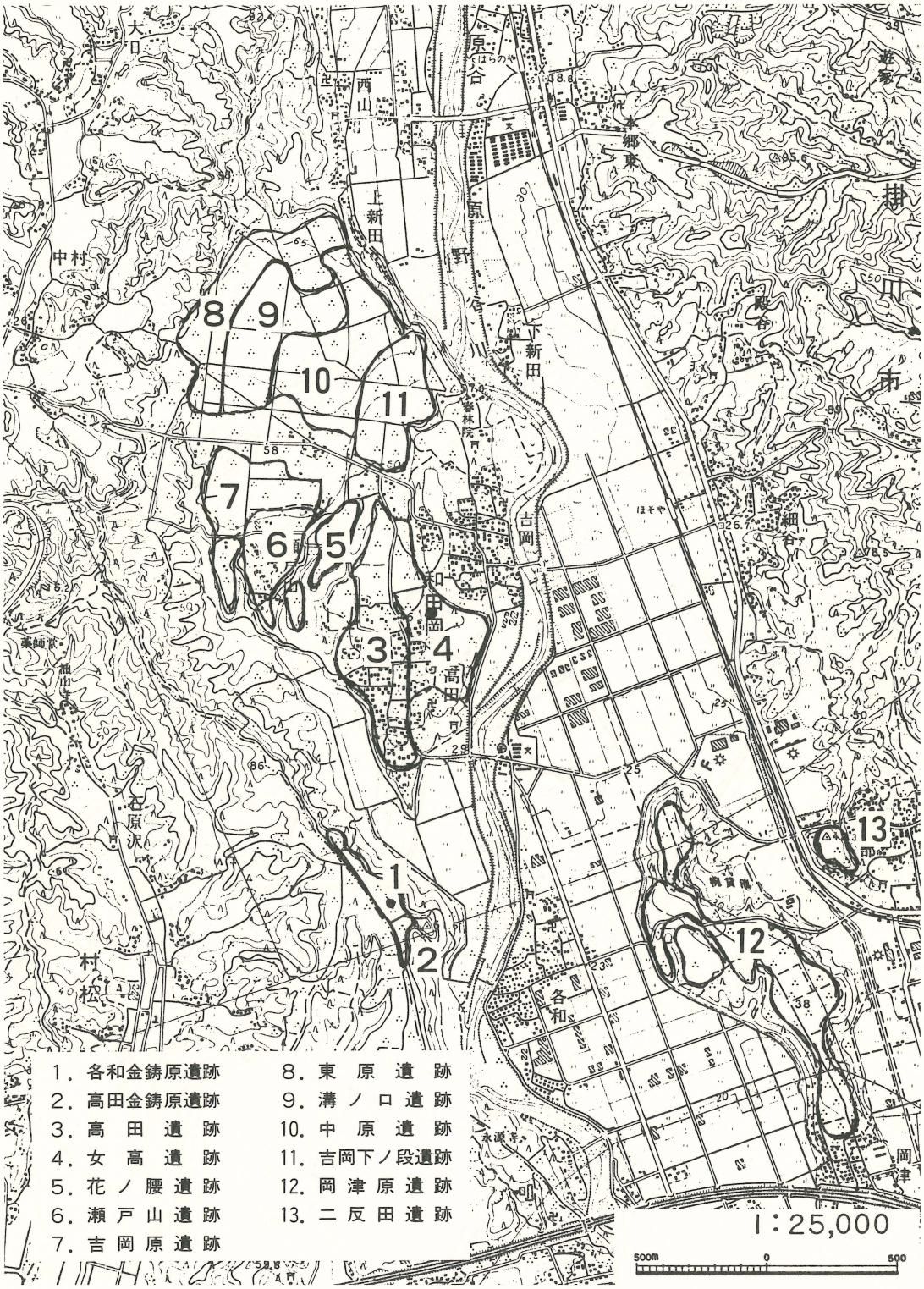
第1図　位置図および周辺遺跡図 …… 1
第2図　金鋳原遺跡周辺環境図 …… 2
第3図　発掘区および遺構分布図 …… 6
第4図　東区土壙実測図 …… 8
第5図　西区墓壙実測図 …… 10

表　目　次

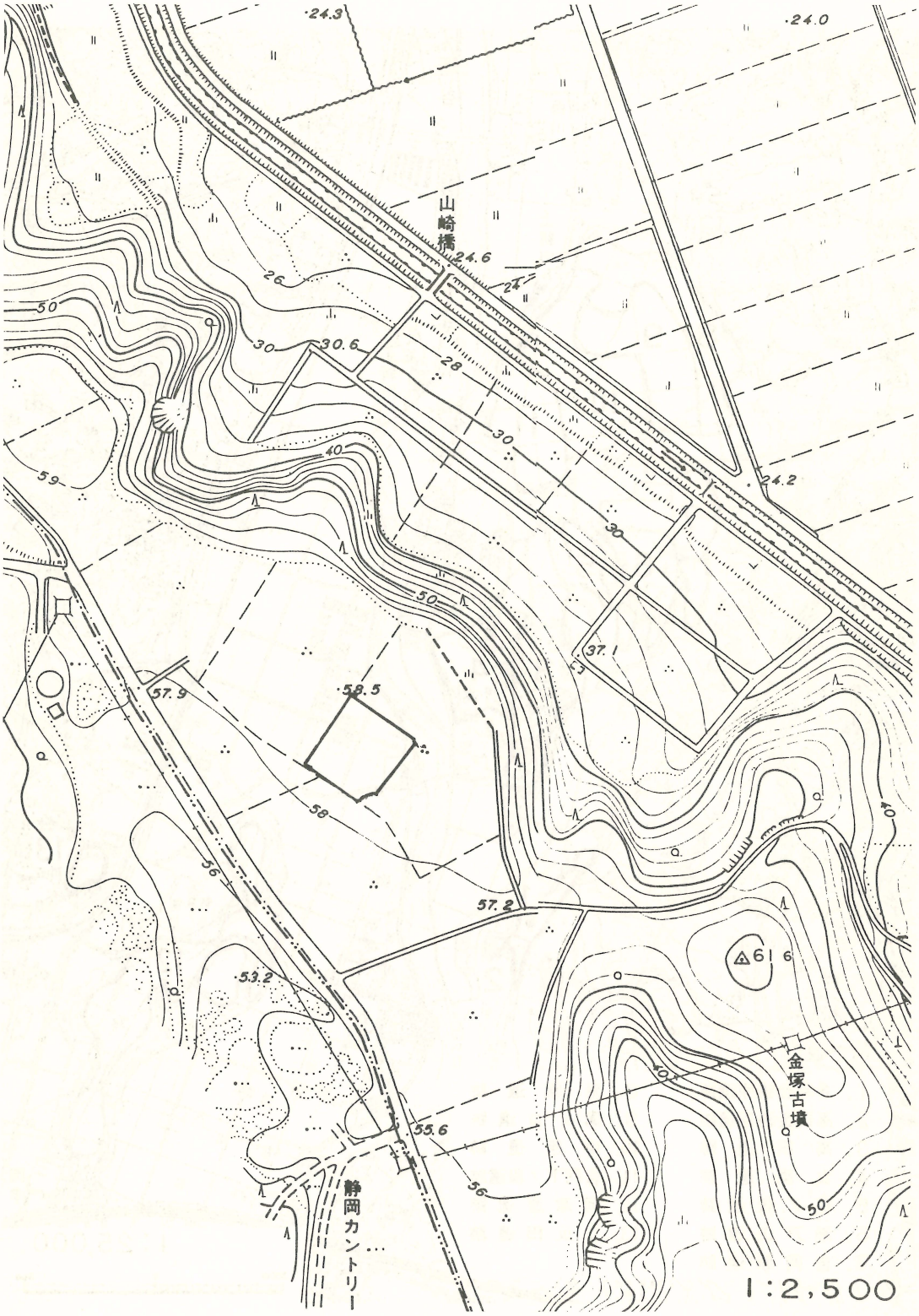
表　1　東区遺構一覧表 …… 7
表　2　西区遺構一覧表 …… 9
表　3　南区遺構一覧表 …… 11

図　版　目　次

図版Ⅰ　金鋳原遺跡と周辺環境
図版Ⅱ　(1)　東区全景（北から）
　(2)　土壙、ESF－04
図版Ⅲ　(1)　溝状遺構SD－02、集石溝状遺構SD－03、SD－04
　(2)　集石溝状遺構SD－03（左）、SD－04（右）
図版Ⅳ　(1)　集石溝状遺構SD－06、土壙SF－22A
　(2)　掘立柱建物跡SH－01、溝状遺構SD－05
図版Ⅴ　(1)　西区全景（北東から）
　(2)　墓壙　WSF－05
図版Ⅵ　(1)　墓壙　WSF－06
　(2)　墓壙　WSF－08
図版Ⅶ　(1)　墓壙　WSF－12
　(2)　墓壙　WSF－13
図版Ⅷ　(1)　溝状遺構SD－01
　(2)　近代初頭井戸状遺構SX－01
図版Ⅸ　(1)　弥生式土器
　(2)　弥生式土器



第1図　位置図および周辺遺跡図



第2図　金鋳原遺跡周辺環境図

I 経　　過

1. 調査に至る経過

金鋳原遺跡は静岡県遺跡地名表（昭40・昭54）には登載されていない遺跡であり、昭和50年内藤次郎氏、岩井克允により当該地を含めた各和原段丘を踏査した結果、土器の採集によって知られるようになった。

金鋳原遺跡の所在する各和地区にかぎらず掛川市域の農家は茶の生産を生活の糧としており、その生産性を向上させるため老化した茶樹改植が行なわれており、年々その規模が増大してゆく傾向にある。

このようななかで土地所有者の萩田　正氏から周囲が既に改植がなされており、改植計画があるので、必要ならば遺跡を調査されたい旨掛川市教育委員会へ連絡があった。掛川市教育委員会では過去において改植に際して遺跡が未調査のまま消滅したこともあり、その轍を踏まないためにも発掘調査の必要性を理解していただくとともに、周囲が改植済のため調査はすべて人力によるため埋戻し作業は多少の不出来を了解していただき、発掘調査の了解を得て調査に移った。

2. 調　査　経　過

調査は発掘調査区域全体の成園となっている茶樹の抜根から開始した。茶樹は既に80年以上を経過し、その間に台切育成しているが老化が著しく、重機が使用できず手作業となり困難をきわめた。

次いで、地形測量に必要な水準点を東方3㎞離れた県道40号線沿に設置されている一等水準点から移設した。発掘区および周辺の地形測量は縮尺 $\frac{1}{100}$ で行なった。

発掘調査にあたっては隣地への遺跡の拡がりを確認するため周囲に幅1.5ｍのトレンチを設定し全域を発掘調査した。周囲が茶園であるため、排土は調査区内で処理しなければならなかった。

発掘調査した結果見いだされた遺構は合計66基で、その時期は弥生時代と近代初頭であった。

II 位置と環境

1. 位　　置

金鋳原遺跡は掛川市役所から西へ6㎞ほど行った各和原段丘の中ほどに位置する。地籍は掛川市各和字金鋳原1313番に属する。

2. 自然的環境

掛川市の北方、八高山の麓から発する原野谷川が多くの解折谷、河岸段丘、沖積地を形成しながら流下しているが、右岸の和田岡地では上位・中位・下位の三段にわたって段丘がみとめられる。上位段丘は標高54～66内外、中位段丘は標高51～56㎡内外、下位段丘は30～40㎡内外である。また、高田原においては吉岡原の中位段丘に続くもので標高41～51㎡内外である。そして谷を隔てた南の各和原では上位段丘が標高43～50㎡内外、中位段丘が標高34～36㎡内外、下位段丘が30㎡内外である。金鋳原遺跡の存するのは上位段丘のなかほどである。

3. 歴史的環境

次に金鋳原遺跡周辺の歴史的環境についてみると、原野谷川流域にはこれまでの調査から縄文時代をはじめ、各時代の遺跡が分布していることが明らかとなっている。このなかで、右岸の和田岡地区の縄文時代から弥生時代の遺跡についてみると、まず吉岡地区では吉岡原上位段丘上には東原遺跡、中原遺跡、溝ノ口遺跡、吉岡原遺跡、瀬戸山遺跡、上ノ段遺跡が分布している。中位段丘上には花ノ腰遺跡、吉岡下ノ段遺跡が広範囲にわたって包蔵されている。下位段丘上には林遺跡、西原遺跡が包蔵されている。つぎに吉岡原中位に続く高田原中位段丘上には、女高遺跡をはじめ高田遺跡、花ノ腰遺跡が包蔵されている。

高田地区の南側の小沖積平野を隔てて北から南にのびる各和原地区の掛川市域には全域が弥生時代から古墳時代前期の遺跡包蔵地である。北から、今回一部分を調査することになった各和金鋳原遺跡、高田金鋳原遺跡などである。また、この地域には古墳時代の前方後円墳の金塚古墳をはじめ、道地古墳、永源寺境内古墳、下山横穴群が所在する。

（松本芳親）

Ⅲ　調査の内容

1.　土　　層

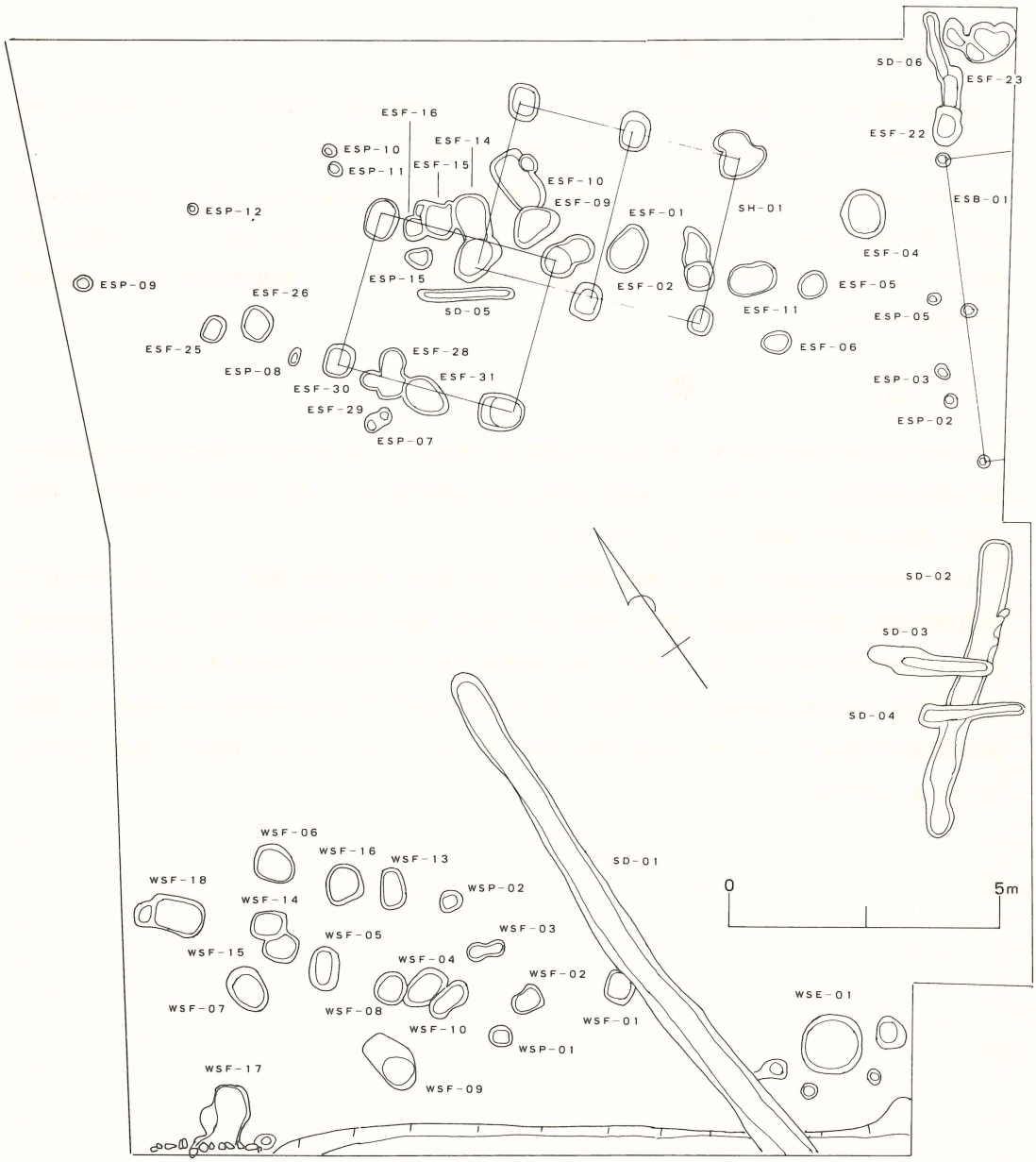
金鋳原遺跡は北から南にのびる段丘上に、茶畑として開墾されて平坦状となっているため、堆積状態は地山直上まで撹乱され、かろうじて遺構の破壊をまぬがれている。

層位を地表からみると第Ⅰ層は表土であり、耕作土である。黒褐色を呈し厚さは40～60㎝である。第Ⅱ層は開墾のため撹乱著しく、黒褐色土と暗黄色土とが不規則に混っている土層で、下位になるほど暗黄色土が多くなっている。厚さは20～30㎝である。第Ⅲ層は暗黄色粘土層の地山で遺構面である。

2.　遺　　構

このたびの発掘調査の結果、発見された遺構は、発掘区のほぼ中央部から南西にかけて発見された溝状遺構ＳＤ―01を境にして東境、西境および南境に集中して発見された。それぞれ、東区、西区、南区と呼び、概略を述べることにする。

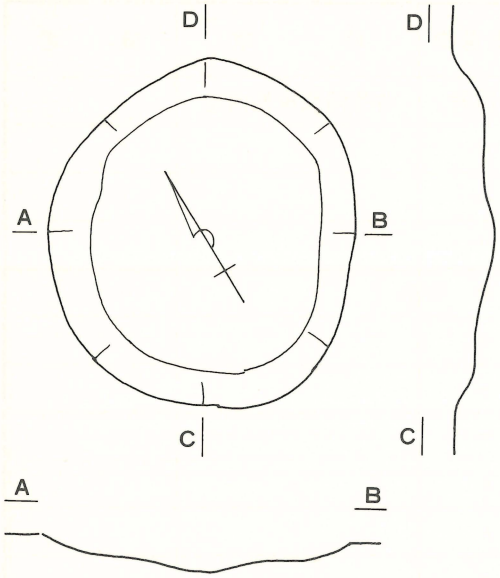
東区では竪穴住居跡の一部１、掘立建物跡２、小土壙18、集石溝状遺構１、小穴６のあわせて28遺構である。竪穴住居跡は北側の一部分のみである。柱穴３が発見されたことから、規模は長辺が5.7ｍほどの住居跡であったろう。掘立建物跡２軒のうち１軒は柱穴６本、残り１軒は柱穴４本である。小土壙は規模は一定しておらず、平面形も楕円形のほか不整形のものが多い。集石溝状遺構はほぼ南北方向で地山を浅く掘り川原石を詰めている。これらの遺構を一覧表に示すとＰ.７のようになる。



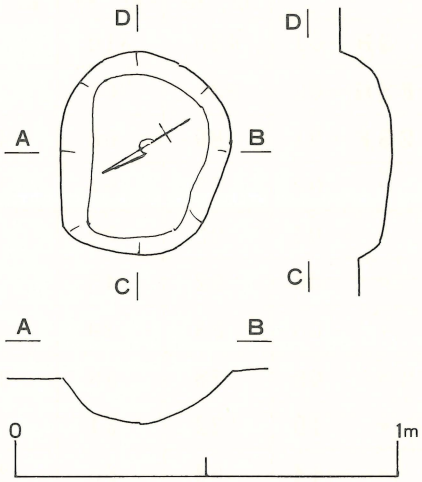
第3図　発掘区および遺構分布図

表1　東区遺構一覧表

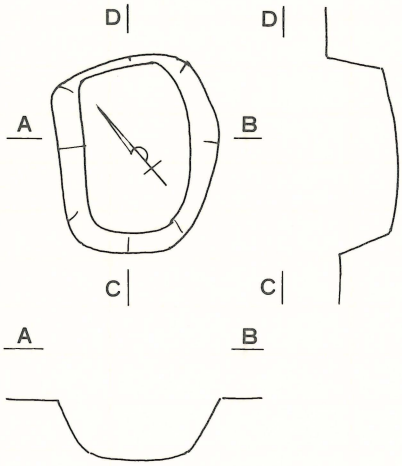
遺構番号	規模			出土遺物	時期	備考
	長軸	短軸	深さ			
SH－01	420	310	—	土器片	弥生時代後期前半	
ESH－02	330	300	—	〃		
ESF－01	89	68	45	〃		
〃 －02	57	54	37	〃		
〃 －04	92	80	9	〃		
〃 －05	52	45	9	〃		
〃 －06	53	39	10	〃		
〃 －09	78	53	34	〃		
〃 －10	122	61	7	〃		
〃 －14	68	66	33	〃		
〃 －15	65	50	21	〃		
〃 －16	47	45	34	〃		
〃 －22	71	51	24	〃		
〃 －23	67	49	30	〃		
〃 －25	51	42	17	〃		
〃 －26	59	58	19	〃		
〃 －28	50	41	32	〃		
〃 －29	60	40	28	〃		
〃 －30	38	35	30	〃		
〃 －31	87	72	34	〃		
ESP－02	28	23	16			
〃 －03	32	22	12			
〃 －05	30	20	26			
〃 －07	51	24	16			
〃 －09	34	34	13			
〃 －10	38	30	9			
〃 －11	39	31	10			
〃 －12	26	11	23			
SD－05	179	17～22	8	川原石		
〃 －06	130	22～29	11	〃		



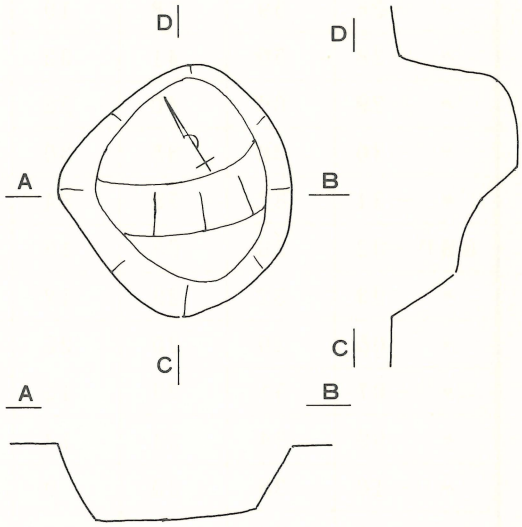
ESF－04 実測図



ESF－06 実測図



ESF－25 実測図



ESF－26 実測図

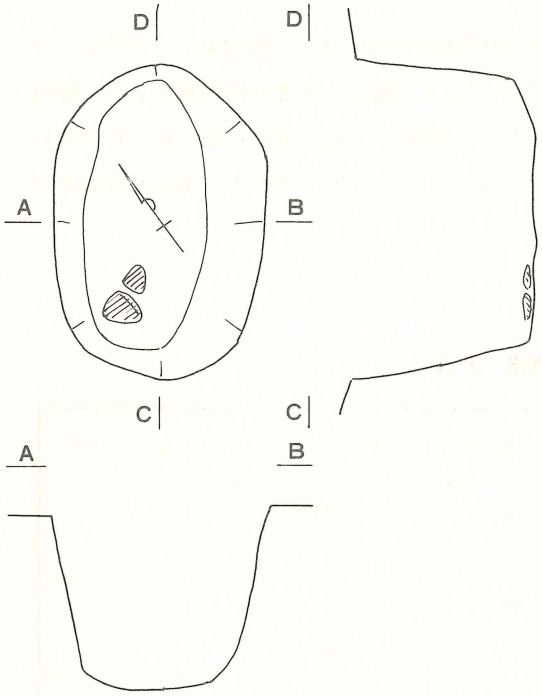
第 4 図　東区土壙実測図

つぎに、西区の遺構についてみると、発掘された遺構は弥生時代の小土壙16基、小穴2基、近代初頭井戸状遺構1基のあわせて19基である。弥生時代の小土壙はいずれも楕円形を呈し、壙内からは挙大の川原石を1個ないし2個が発見されている墓壙である。近代初頭とみられる井戸状遺構は貝殻を微細に砕いて石炭状にして、粘土に混ぜた、いわゆる、タタキと言われるものでつくられている。農耕用溜とも思えるが詳かでない。

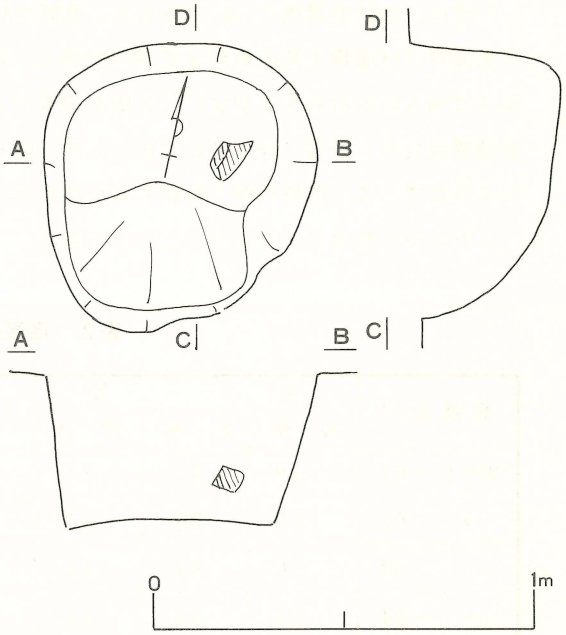
これらを一覧表に示すと次のとおりである。

表2　西区遺構一覧表

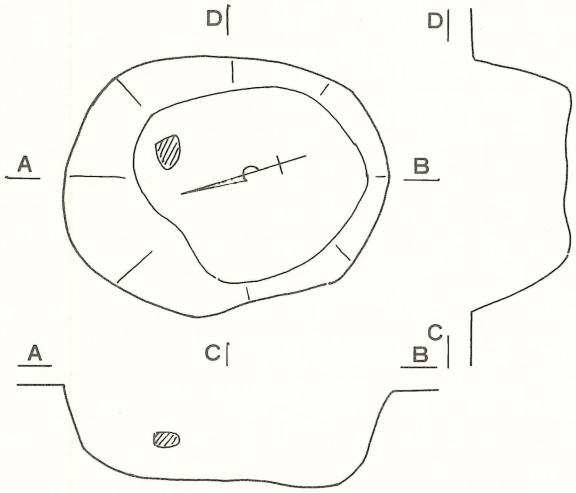
遺構番号	規模			出土遺物	時期	備考
	長軸	短軸	深さ			
WSF－01	59	55	35	土器片	弥生時代後期前半	
〃 －02	59	36	17	〃	〃	
〃 －03	70	39	14	〃	〃	
〃 －04	86	54	12	〃	〃	
〃 －05	84	56	49	〃	〃	
〃 －06	72	70	42	〃	〃	
〃 －07	86	66	25	〃	〃	
〃 －08	62	57	30	〃	〃	
〃 －09	82	77	45	〃	〃	
〃 －10	88	47	35	〃	〃	
〃 －13	74	47	32	〃	〃	
〃 －14	61	51	35	〃	〃	
〃 －15	63	55	35	〃	〃	
〃 －16	71	65	47	〃	〃	
〃 －17	44	39	54	〃	〃	
〃 －18	120	63	33	〃	〃	
WSP－01	44	38	20			
〃 －02	40	30	22			
SD－01	1030	26～27	6～28	土器片	弥生時代中期初頭	
SX－01	96	90	70	〃	近代初頭	小穴4付



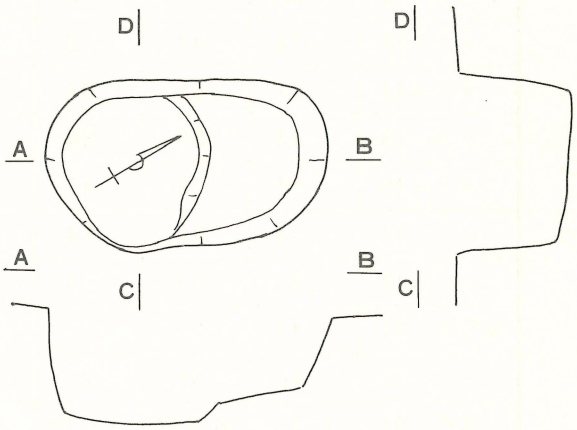
WSF－05 実測図



WSF－06 実測図



WSF－07 実測図



WSF－13 実測図

第 5 図　西区墓壙実測図

南区では溝状遺構SD－02が東西方向に掘られ、これに直交するように集石溝状遺構SD－04、SD－05が南北方向に重複して発掘された。これらは同時期に掘られたものではなく、集石溝状遺構がやや時期をあとにして掘られたものとみられ、また、排水用ではないとみられるが、詳かでない。

これらを一覧表に示すと次のとおりである。

表3　南区遺構一覧表

遺構番号	規模			出土遺物	時期	備考
	長軸	短軸	深さ			
SD－02	600	50～58	6～25	土器片	弥生時代後期前半	
〃－03	196	28～53	15～17	〃	〃	
〃－04	193	22～42	14～17	〃	〃	

3. 遺　　物

このたびの発掘調査の結果、出土した遺物は土器と石器である。

(1.) 土　　器

土器は弥生時代で二時期に分けられる。

第1群土器　溝状遺構SD－01から出土している。条痕を主とした整形文の土器と目の荒い櫛状器具による横線を施した土器とである。続水神平式土器として総括される土器とみてよく、弥生時代中期初頭である。

第2群土器　東区ESF－09、ESP－15から出土している。この地方での弥生時代後期前半に盛行した菊川式土器である。発見された限りでは土器の文様は縄文よりも櫛描きまたは箆描き斜線が大かたを占める。

(2) 石　　器

出土した遺物のうち石器はごく少量で、敲石1、凹石2、石斧1、のあわせて4点である。いずれも弥生時代後期前半の遺構から出土している。

Ⅳ　ま　と　め

今回の調査の対象となった金鋳原遺跡の南側は、既に改植によって消滅しており、土器片を採集されている。また北側の茶畑にも土器の散布をみることから、金鋳原遺跡の範囲は相当拡がっているものと思われる。

それでも今回の調査によって金鋳原遺跡の内容を明確にすることができた。

発掘した遺構は竪穴住居跡、掘立建物跡小土壙群、溝状遺構、小穴、墳墓群などであった。竪穴住居跡は長辺5.7ｍほどの隅円長方形を呈するものとみられるが、遺構の大部分は隣地に及んでいるので詳かでない。掘立建物跡は２軒である。SH—01は大形のもので長辺4.2ｍ、短辺３ｍの規模である。柱穴は６ケ所である。SH—02は柱穴が４ケ所ある掘立建物跡である。いずれも高床式の倉庫跡とみられる。SH—01が先に建てられている。

小土壙群は東区にみられる。いくつかの土壙が重なりあい、なかには掘立建物跡と重複しているものもある。貯蔵穴としてつくられたものと用途不明のものとがある。つくられた時期は掘立建物跡と大差はないとみられる。

溝状遺構は排水用とみられるSD—01とSD—02のほかに、浅く掘られた溝内に挙大の川原石を山形に積み上げた集石溝状遺構が４条発掘された。これらは明らかに排水用のものではなく、恐らく除湿のためにつくられたであろう。しかし、SD—03、SD—04のように２条がずらして、並行して造られているものもあり、詳かでなく、今後の類例を待ちたい。

墓壙群は西区に集中して掘られていた。墓壙の規模は50～100㎝のものが、その多くを占めている。平面形は楕円形を呈し、いずれの墓壙からも挙大の川原石が１個ないし２個、発見された。この外、礫部土壙墓の一部とみられる遺構が発見されたが、その大部分は用地外であるため詳かでない。

このように、金鋳原遺跡は各和原上位段丘上に弥生時代中期初頭から弥生時代後期前半にかけて営まれた高地性集落の一部分であった。

図版 I

金鋳原遺跡と周辺環境

図版 II

(1) 東区全景（北から）

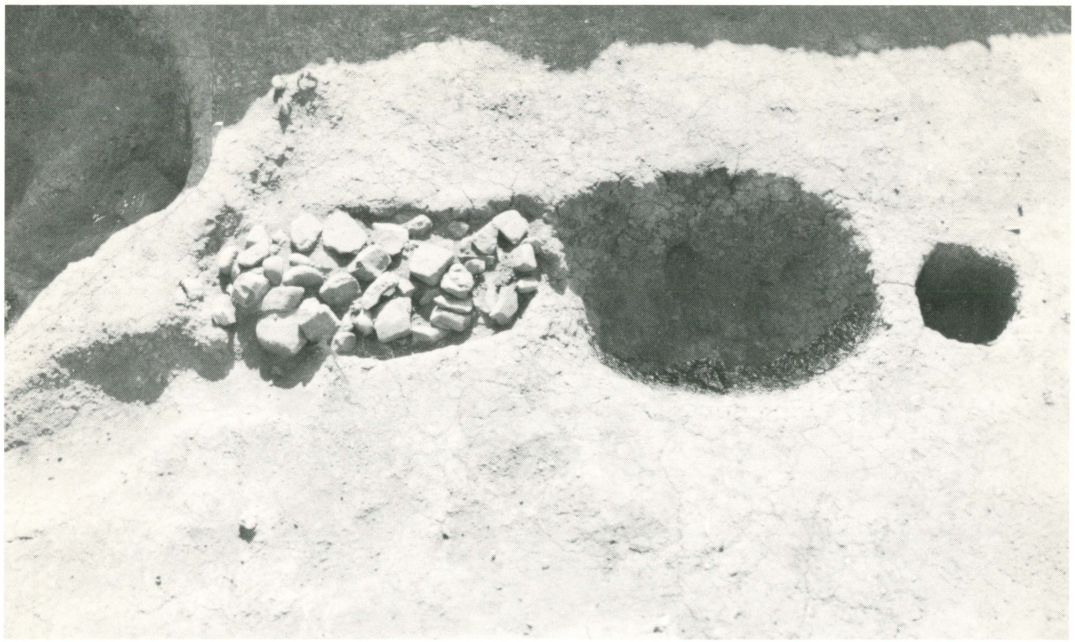
(2) 土坑 ESF-04

図版 III

(1) 溝状遺構　SD-02、集石溝状遺構　SD-03・SD-04

(2) 集石溝状遺構　ＳＤ―03(左)　ＳＤ―04(右)

図版 Ⅳ

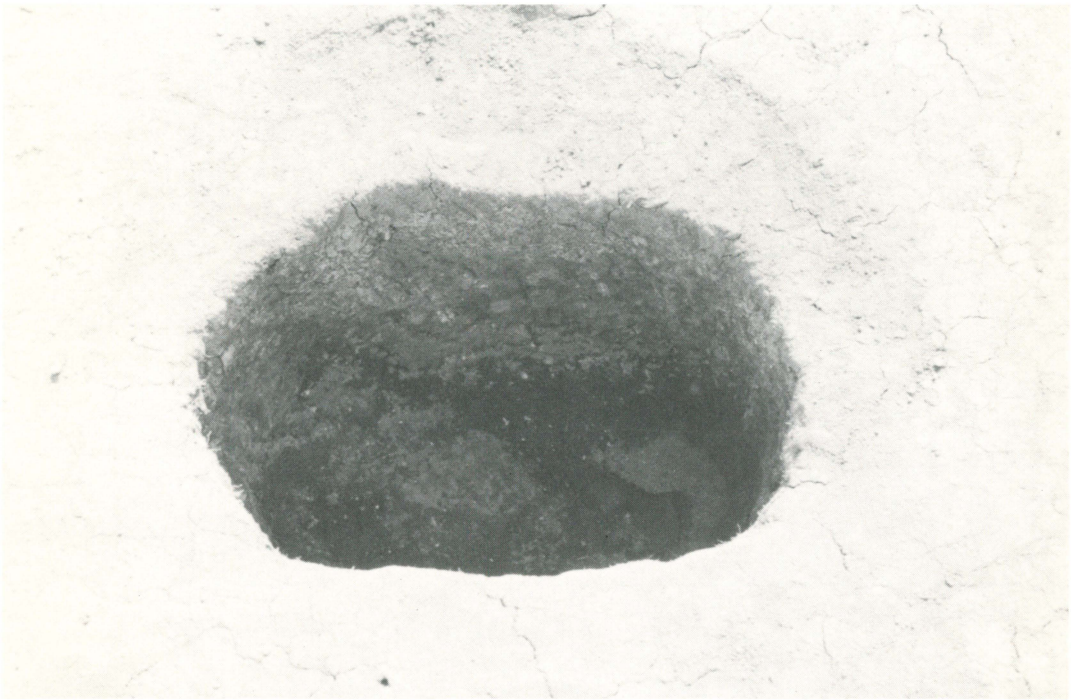


(1) 集石溝状遺構　SD-06・土坑　ESF-22A

(2) 掘立建物跡　SH-01、溝状遺構　SD-05

図版 V

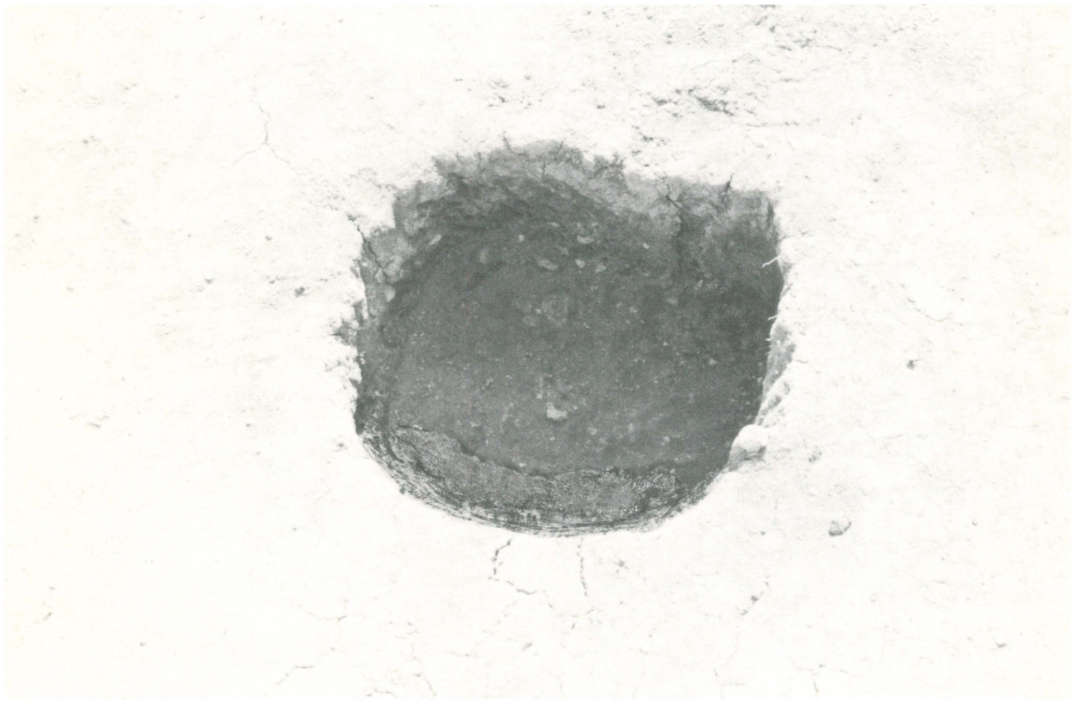
(1) 西区全景（北東から）



(2) 墓坑 WSF-05

図版 VI

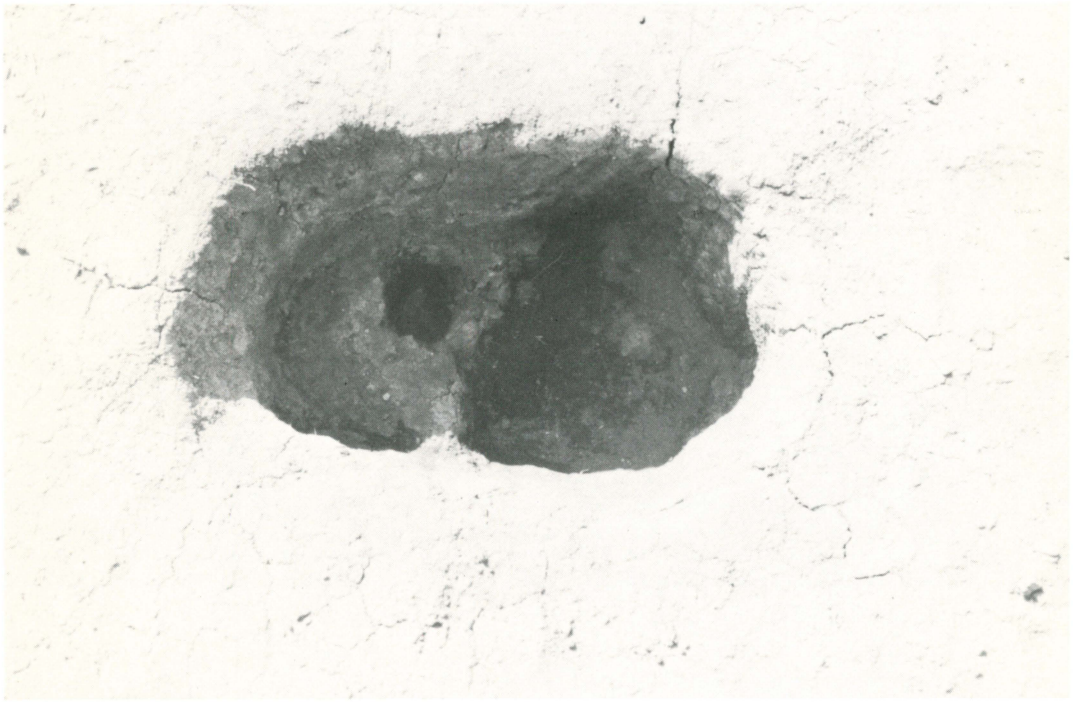
(1) 墓坑 WSF-06



(2) 墓坑 WSF-08

図版 VII

(1) 墓坑 WSF-12

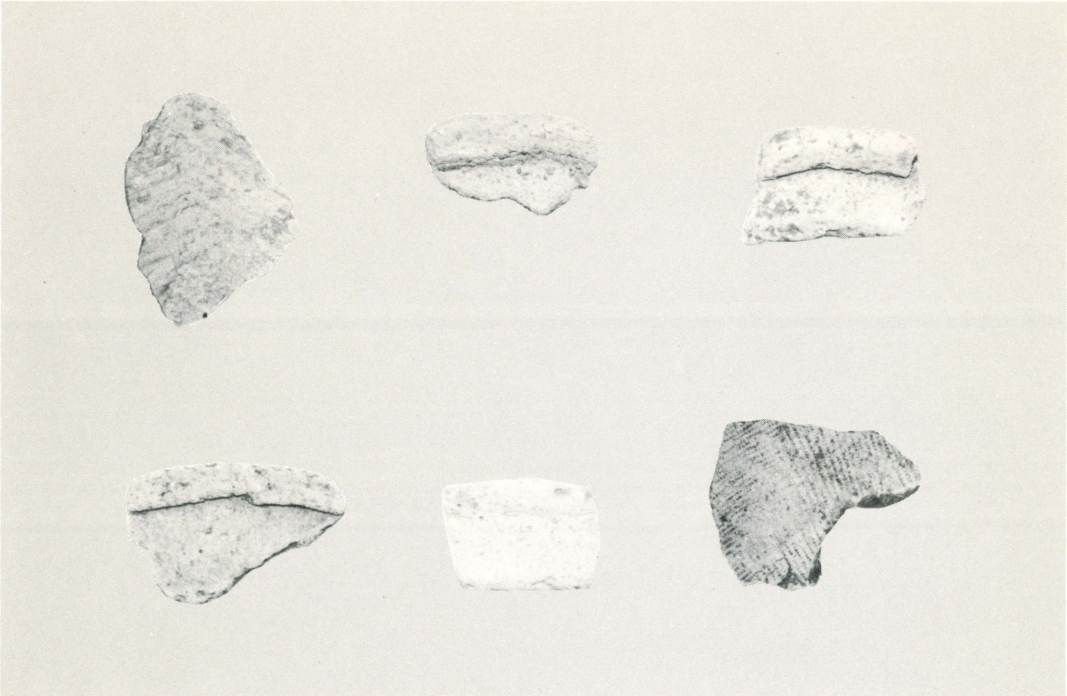


(2) 墓坑 WSF-13

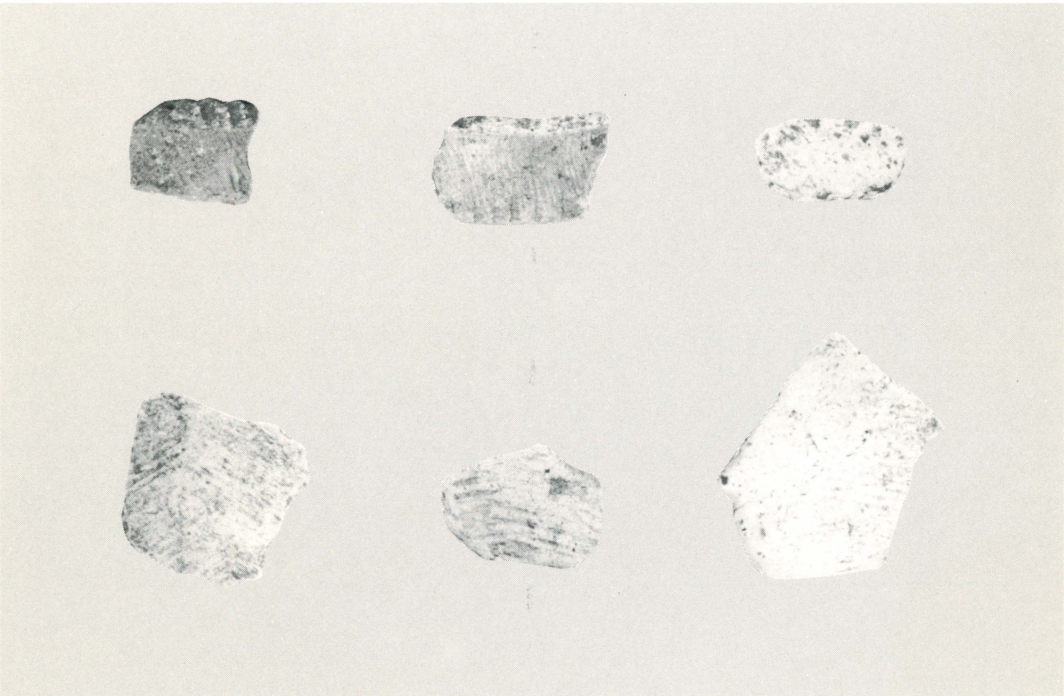
(1) 溝状遺構　SD-01

(2) 近代初頭井戸状遺構　SX-01

図版 IX



(1)　弥生式土器



(2)　弥生式土器

金鋳原遺跡発掘調査概報

昭和57年3月31日

編　集　掛川市教育委員会
発　行　掛川市教育委員会
印　刷　静岡市豊田3丁目5番30号
株式会社　三　創
TEL　0542-82-4031